

東海北陸自動車道開通に伴う五箇山観光の変容

Impacts of the Toukai-Hokuriku Expressway on Tourism in Gokayama

助 重 雄 久・五箇山地域研究グループ

SUKESHIGE Takehisa, Researching Group of Gokayama Area

はじめに

富山県南西部の五箇山地域は、白山山系の急峻な山岳に囲まれた河谷に位置しており、平野部とは長い間隔絶されていた。こうした隔絶は合掌集落に代表される独自の民俗・文化を生みだし、それらが秘境をイメージさせてきた。しかし、秘境イメージは国道整備に伴う冬季通行止の解消によって薄れ、多くの観光客が五箇山を訪れるようになった。

こうしたなかで、五箇山の相倉・菅沼合掌集落は岐阜県の白川郷・荻町集落とともに1995年にユネスコの世界文化遺産に登録され、後世に引き継ぐべき独自の文化が伝承されている地域として脚光を浴びた。さらに、五箇山は2000年の東海北陸自動車道開通によって富山市や金沢市から1時間圏内となり、観光客の増加が期待された。

しかし、五箇山を訪れる観光客は世界遺産登録直後から減少傾向に転じた。とくに東海北陸自動車道の白川郷延伸後は、五箇山の合掌集落よりも規模が大きい荻町集落に観光客が集中する傾向が強まった。荻町集落に立ち寄った観光客は、高速自動車道で金沢・和倉温泉・能登方面に向かったり、白山スーパー林道で加賀方面に向かったりすることが多くなり、五箇山は完全に通過するか、短時間しか滞在しない「通過観光地」になってしまう恐れが生じた。

高速交通体系の整備に伴う影響に関して、溝尾(2003)は高速交通に疎遠であった地域の立地が好転する可能性があるいっぽうで、観光地間の競争が激化し、観光地の優勝劣敗が明らかになることを指摘した¹⁾。森田(2004)は、東海北陸自動車道の開通によって年間100万人以上の観光客を集めるようになった白川郷においても、短時間滞在の日帰り客が多い「素通り」型観光地化が進んでいることを指摘した²⁾。また岡本(2004)は、富山県内のなかでも五箇山地域における公共交通の利便性低下が著しく、「通過観光地」になってしまう恐れがあることを指摘した³⁾。さらに富山県では、北陸新幹線の開通によって観光地としての規模・歴史・知名度が勝る金沢に観光客が流れ、県全体が「通過観光地」化してしまうことへの懸念が高まっている⁴⁾。

本研究では、先学が指摘した問題点をふまえながら、五箇山における観光の実態を宿泊施設や観光客への聞き取り調査をもとに考察する。また、聞き取り調査の結果をもとに東海北陸自動車道の開通が五箇山観光にもたらした影響や、今後への課題について検討していく。

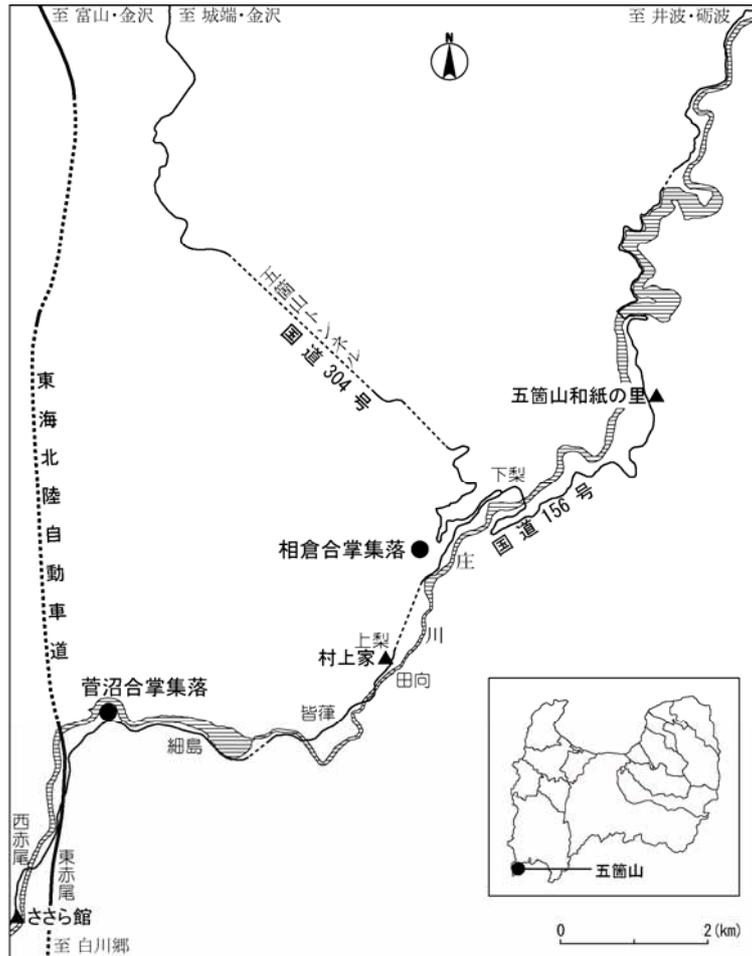


図1 研究対象地域 (助重原図)

五箇山地域における交通路の変遷と観光の動向

1. 交通路の変遷

五箇山地域(現・南砺市、旧平村・旧上平村・旧利賀村)は庄川とその支流である利賀川の流域に位置しており、これらの河川が刻んだ谷に集落が点在している(図1)。五箇山と富山県西部に広がる砺波平野との間は急峻な高清水山地によって隔てられている。また、庄川は岐阜県境から砺波平野への出口まで深い峡谷を流れており、庄川沿いに交通路を開くことは困難を極めた。このため、砺波平野との往来には高清水山地の峠を越える道が長らく利用されてきた。しかし、これらの峠道も冬季は深い積雪に阻まれ、外部とは完全に隔絶された地域となっていた⁵⁾。

大正末期から昭和初期にかけては、庄川沿いの道路と細尾峠越えの道路が整備され、下梨と城端を結ぶバスも運行されるようになった。しかし、これらの道路は第2次世界大戦後の高度経済成長期に至っても依然として冬季の通行ができなかった。

五箇山と砺波平野とを結ぶ道路は、1970年代後半になってようやく冬季の通行止が解消された。1979年には庄川沿いの国道156号で橋梁やスノーシェットの整備が進み、通年通行が可能となった。また、1984年には五箇山と金沢・城端方面を結ぶ国道304号の五箇山トンネルが完成し、峠越えのルートも通年通行が可能になった。

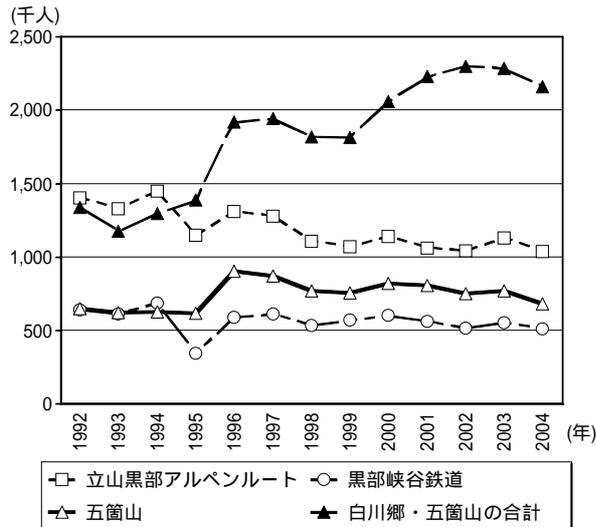


図2 主要観光地における観光客入り込み数の推移
(富山統計アーカイブス、地域の経済 2005 をもとに作成)
注:岐阜県分は 1997 年まで年度ベース。他は暦年ベース。

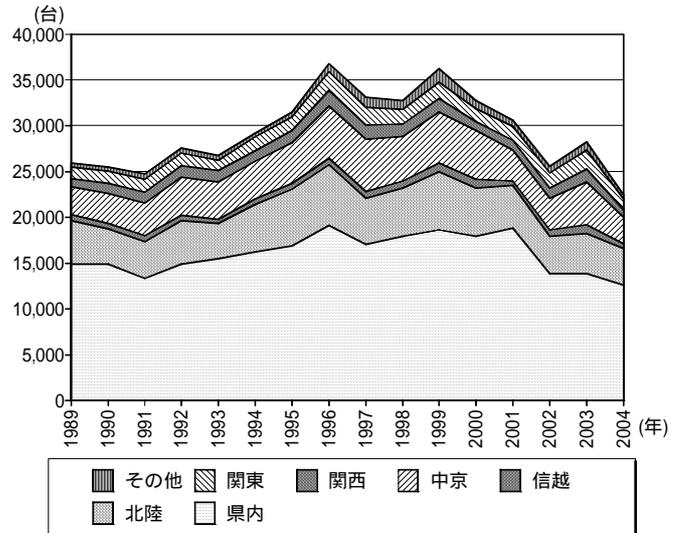


図3 登録地方別車両入り込み台数の推移
(五箇山観光協会資料をもとに作成)
注:調査日は 7~10 月の最終土・日・月曜日

2000 年 9 月 30 日には東海北陸自動車道の福光 - 五箇山間が開通し、五箇山は冬季通行止の解消からわずか 20 年あまりで高速交通の時代を迎えた。東海北陸自動車道は 2002 年 11 月 16 日に五箇山から白川郷まで延伸され、最後の未開通区間となった白川郷 - 飛騨清見ジャンクション間も 2007 年の開通をめざして工事が進められている。

2. 観光客入り込み数の推移からみた観光の変化

五箇山への年間観光客入り込み数は 1971 年には 13 万人にすぎなかった。しかし、1970 年から国鉄が展開していた「ディスカバー・ジャパン」キャンペーンは、金沢・飛騨高山を巡る「古都・小京都ブーム」を巻き起こし、中間に位置する「秘境」五箇山にも多くの観光客が訪れるようになった。この結果、五箇山への観光客入り込み数は 1975 年に 38 万 8 千人、1980 年には 60 万 2 千人と増加の一途をたどった。さらに、五箇山トンネルが開通した 1984 年には 70 万人台、1986 年には 80 万人台に達し、1991 年には 113 万 2 千人にもものぼった⁶⁾。

1992 年以降は、バブル景気の崩壊や海外旅行の急増に伴う国内旅行の低迷もあって、入り込み数が再び 60 万人台で低迷したが、1995 年 12 月 9 日に合掌集落が世界文化遺産に登録されたことから、翌 1996 年には 90 万 1 千人に回復した。しかし、「世界遺産ブーム」は長続きせず 1997 年以降は減少傾向に転じ、2004 年には三たび 60 万人台まで落ち込んだ。

図 2 は 1992 ~ 2004 年における立山黒部アルペンルート、黒部峡谷鉄道、五箇山の年間観光客入り込み数と、白川郷・五箇山の入り込み数の合計を示したものである。この図をみると、富山県内の主要観光地である立山黒部アルペンルート、黒部峡谷鉄道、五箇山は観光客数の差こそあるものの、1995 年以降ほぼ同じ動向を示してきたことが明らかとなる。これらの観光地は個人旅行でも団体のパッケージツアーでも、たとえば「五箇山合掌集落と立山黒部アルペンルート 3 日間」といったように、同じプランの周遊ルートに組み込まれることが多い。また 3 か所はいずれも観

光客が夏に集中するため、夏の天候しだいで年間の入り込み数が同じように増減することも、類似した動向を示す一因と考えられる。

次に、五箇山の観光客入り込み数を白川郷・五箇山の合計と比較してみると、1999年まではほぼ同じ動向を示してきたが、2000年以降は五箇山の入り込み数と白川郷・五箇山の入り込み数合計との間に大きな開きが生じた⁷⁾。この開きは、東海北陸自動車道の開通後、五箇山と白川郷の観光客入り込み数の差がしだいに大きくなってきたことを示しており、卑近な言い方をすれば白川郷が「勝ち組」、五箇山が「負け組」になりつつあることを意味しているといえよう。

3. 車両入り込み台数の推移からみた観光の変化

図3は、五箇山観光協会が1989～2004年の間に行ってきた車両入り込み台数調査の結果を車両ナンバーの登録地方別に示したものである。この図に示したデータは、7～10月の土・日・月曜日の分のみであるうえに、富山ナンバーや北陸・中京のナンバーには観光以外の用務で入り込んだものも多数含まれると考えられる。そのため、観光客の動向を必ずしも正確に示しているとはいえないが、東海北陸自動車道の開通後はすべての地方からの入り込み台数が減少傾向にあることが読み取れる。このことは五箇山が「通過観光地」化しつつあることを示唆している。入り込み車両の減少は、排気ガスや持ち込みゴミなど「観光公害」の抑制には貢献するものの、観光収入によって生活している住民にとっては経済的に大きな痛手を負うことになりかねない。

宿泊施設の利用実態

1. 調査方法

「通過観光地」は、当然のことながら日帰り客や短期滞在客が増加する。したがって、宿泊施設の利用状況は「通過観光地」化の進み具合を測るバロメーターとなる。そこで、本研究では五箇山地域の旧平村と旧上平村にある宿泊施設を対象に聞き取り調査を行い、この結果をもとに東海北陸自動車道開通後における観光客数や旅行形態の変化等を考察した⁸⁾。

調査対象は五箇山の全宿泊施設29軒(旅館6、民宿18、国民宿舎・ロッジ・コテージ等5)で、うち20軒(旅館5、民宿14、国民宿舎1)から回答を得た。集落別の回答数は相倉8、下梨3、上梨5、田向1(以上、旧平村)、皆葎(みなむくら)1、西赤尾2(以下、旧上平村)であった。これらの集落は相倉が国道304号沿いの山腹にあるのを除けば、いずれも国道156号沿いの谷底に位置している(図1)。なお、質問項目は表1に示した。

2. 調査結果

1) 営業年数

回答した20軒の宿泊施設は、すべて営業年数が10年以上であった。

2) 多客期

観光シーズンのなかでもっとも宿泊客の多い時期は、ゴールデンウィーク(4月下旬～5月上旬)とこきりこ・麦屋まつりの時期(9月下旬)が各6軒、夏の盆休み(8月中旬)と紅葉の時期(10～11月)が各4軒であった。



写真1 こきりこの舞いを教える民宿
(2005年10月29日 李 豊 撮影)

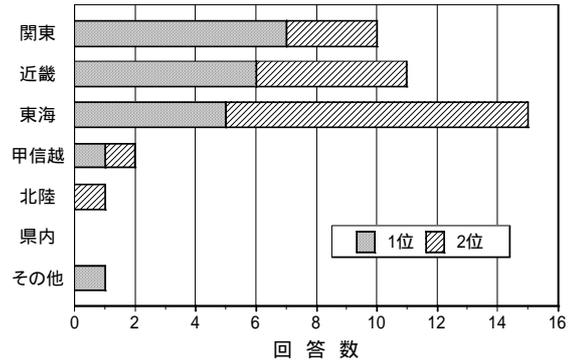


図4 宿泊客の居住地(地方別)
(聞き取り調査をもとに作成)

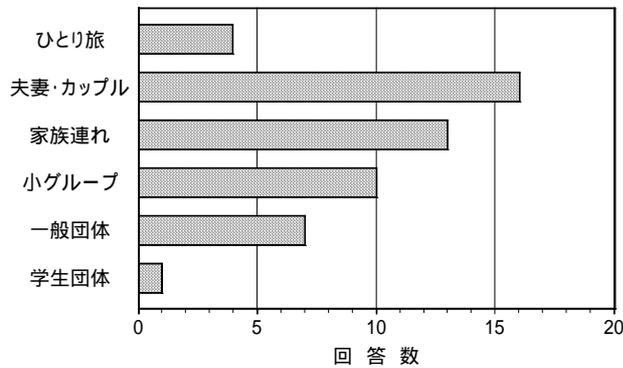


図5 宿泊客の旅行形態(複数回答可)
(聞き取り調査をもとに作成)

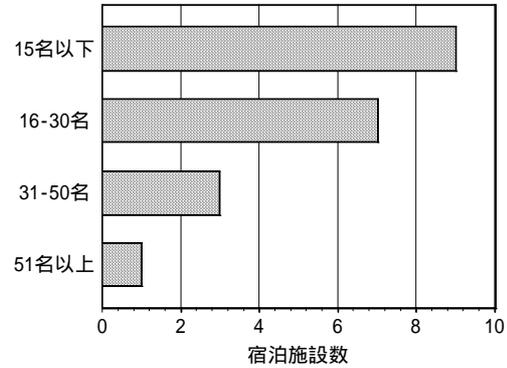


図6 宿泊施設の収容人数
(五箇山観光協会資料をもとに作成)

3) 宿泊客の居住地

図4は「どの方面から来られる宿泊客が多いですか?」という質問に対する回答のうち、上位2位までを地方別に示したものである。この図をみると、関東地方からの宿泊客がもっとも多く宿泊施設が7軒で、次いで近畿地方からが6軒、東海地方からが5軒であった。また、2番目に宿泊客が多く来る地方も合わせると東海地方、近畿地方、関東地方の順となった。

いっぽう甲信越地方や北陸地方は、距離的、時間的には東海地方と大差がないにもかかわらず、宿泊客が少なかった。また富山県内からの宿泊客がもっとも多くと答えた宿泊施設はなかった。甲信越地方や北陸地方、富山県からの観光客は日帰りが多いものと考えられるが、交通費がかからない近距離客は常連客やリピーターになる可能性が高く、今後、近県や富山県からくる宿泊客をどのようにして増やしていくかが課題となろう。

4) 宿泊客の旅行形態

宿泊客の旅行形態は、夫妻・カップルが16でもっとも多く、次いで家族連れが13、少人数グループ(概ね10人未満)が10、一般団体客(概ね10人以上)が7、ひとり旅が4、学生団体客が1であった(図5)。聞き取り調査の対象となった宿泊施設20軒は、国民宿舎「五箇山荘」(収容人

数 85 名)を除けば個人経営の旅館・民宿であり、収容人数も 15 名以下が 9 軒、16～30 名が 7 軒、31～50 名が 3 軒と少ない(図 6)。このように、大部分の宿泊施設は団体客の受け入れが物理的に不可能であるため、家族連れや少人数グループの受け入れが中心になっているものと考えられる。

5)常連客・リピーター

宿泊客に占める常連客・リピーターの割合は 20 軒中 17 軒で 3 割以下であった。いっぽう、残る 3 軒は 5 割以上であった。5 割以上と回答した 3 軒のうち 2 軒は、集客力を高めるために行っているイベントについて尋ねた質問に「五箇山の民話やこきりこ、麦屋踊り等の実演や講習に力を入れている」と答えており、こうした独自の取り組みが多く、常連客やリピーターを惹きつけていると考えてよいであろう。

6)東海北陸自動車道開通後の宿泊客の増減

東海北陸自動車道の開通後、宿泊客が減ったと回答した宿泊施設は 20 軒中 14 軒にのぼった。また、宿泊客が減ったと回答した 14 軒のうち 11 軒は、原因として「東海北陸自動車道を通過してしまい、五箇山に立ち寄らない客が増えた」ことをあげた。

いっぽう、増えたと回答した宿泊施設は 2 軒、変わらないと回答した宿泊施設は 4 軒であった。増えた、あるいは変わらないと回答した 6 軒のうち 5 軒は、相倉の合掌家屋を利用した民宿である。これらは元来収容人数が少ないうえに、合掌家屋に泊まれるという付加価値が変わらぬ人気を支える要因になっていると考えられる。

観光客の動態

1．調査方法と回答者の属性

観光客への実態調査では、相倉・菅沼の合掌集落(周辺施設や駐車場も含む)を訪れた観光客から無作為に対象を選び、聞き取りを行った。質問項目は表 2 に示したとおりで、2004、2005 年とも同じ調査票を使用した。有効回答者は 2004 年が 118 名(男性 54 名、女性 57 名、無記入 7 名)、2005 年が 129 名(男性 76 名、女性 53 名)、計 247 名(男性 130 名、女性 110 名、無記入 7 名)であった¹⁰⁾。また調査地区別の回答者数は、相倉が 95 名(2004 年 45 名、2005 年 50 名)、菅沼が 152 名(2004 年 73 名、2005 年 79 名)であった。

回答者の年齢構成は、20 歳未満が 4 名(1.6%)、20 歳代が 40 名(16.2%)、30 歳代が 33 名(13.4%)、40 歳代が 42 名(17.0%)、50 歳代が 84 名(34.0%)、60 歳以上が 39 名(15.8%)、無回答が 5 名(2.0%)で、50 歳代がもっとも多かった。しかし、20 歳未満と 50 歳代以外は各年齢階層とも 10%台で並んでおり、幅広い年齢層が合掌集落を訪れていた。

2．調査結果

1)観光客の在住地

観光客の在住地は、南砺市の五箇山地域(旧平村・旧上平村・旧利賀村)が 12 名(4.9%)、五箇山地域以外の南砺市が 11 名(4.5%)、南砺市以外の県内が 51 名(20.6%)、県外が 172 名(69.6%)、外国人が 1 名(0.4%)であった。このうち、南砺市以外の富山県内から来訪した観光客の市町村別内訳をみると、もっとも多いのは富山市(旧婦中町を含む)の 25 名で、以下は高岡市(旧福岡町を含む)と射水市が各 7 名、砺波市と氷見市が各 3 名などとなっていた(図 7)。

表2 観光客に対する聞き取り調査項目

| |
|--|
| [性別] a. 男 b. 女 |
| [年齢] a. 20歳未満 b. 20歳代 c. 30歳代 d. 40歳代 e. 50歳代 f. 60歳代以上 |
| 1. どこから五箇山に来られましたか? 《1つだけ回答》 |
| a. 南砺市(五箇山) b. 南砺市(五箇山以外) c. 富山県内...[] 市・町・村 d. 他の都道府県...[] 都・道・府・県 e. 国外...国名[] |
| 2. 五箇山を訪れたおもな目的を教えてください。《1つだけ回答》 |
| a. 観光(宿泊) b. 観光(日帰り) c. 五箇山に住んでいるか実家・親類宅がある d. その他 [] |
| 3. 五箇山までに来るのに利用した交通手段を教えてください。《1つだけ回答》 |
| a. 自家用車 b. 路線バス c. 観光バス d. バイク e. その他 [] |
| 4. 五箇山ではどこに立ち寄りますか? 《複数回答可》 |
| a. 世界遺産 相倉合掌造り集落 b. 世界遺産 菅沼合掌造り集落 c. 道の駅たいら「五箇山和紙の里」 d. 道の駅 上平「ささら館」 e. 村上家 f. その他 [] |
| 5. 五箇山での滞在時間はおよそどのくらいですか? 《1つだけ回答》 |
| a. 30分以内 b. 30分~1時間 c. 1~3時間 d. 3~6時間 e. 半日~1日(日帰り) f. 1日以上(宿泊) |
| 6. 五箇山へはどちらの方面から入ってきましたか? 《1つだけ回答》 |
| a. 富山・立山・黒部方面 b. 高岡・氷見方面 c. 和倉・能登方面 d. 金沢・加賀・東尋坊方面 e. 白川郷・高山方面 f. その他 [] |
| 7. 五箇山を訪れたあと、どちらの方面に向かいますか? 《1つだけ回答》 |
| a. 富山・立山・黒部方面 b. 高岡・氷見方面 c. 和倉・能登方面 d. 金沢・加賀・東尋坊方面 e. 白川郷・高山方面 f. その他 [] |
| 8. 五箇山に来る際には東海北陸自動車道を利用されましたか? 《1つだけ回答》 |
| a. はい b. いいえ 「はい」の場合利用したインター名 a. 五箇山 b. 福光 c. 白川郷 |

いっぽう、県外からの観光客を都道府県別にみると、隣接する石川県が35名ともっとも多く、以下は東京都と愛知県が各16名、福井県が11名、新潟県と大阪府が各9名、長野県と静岡県が各8名、岐阜県が7名などであった(図8)。また、地方別で見ると北海道が1名、東北が7名、関東が30名、北陸・甲信越(富山県内を除く)が66名、東海が33名、近畿が20名、中国・四国が6名、九州が7名、無回答が2名であり、北陸・甲信越や隣接する地方が圧倒的に多いものの、全国各地から観光客が訪れていた。しかし、東北の北部と中国・四国の西部は、富山から直通的な航空便がないうえに陸路でも不便なことから、ひとりも来訪していなかった。

なお、南砺市の五箇山地域および五箇山地域以外から来訪した計23名のうち18名は、2005年10月30日(日)に菅沼集落で回答していた。当日は菅沼合掌集落の隣接地にある五箇山青少年旅行村「合掌の里」で、民謡や秋の味覚を楽しむ「四季の五箇山もみじ日和」や、赤かぶオーナーが8月に種をまいた赤かぶを収穫する「みんなで農作業の日 in 五箇山」が開催されていた。当日ききとり調査に回答していただいた南砺市民の多くは、これらのイベントの参加者であった。

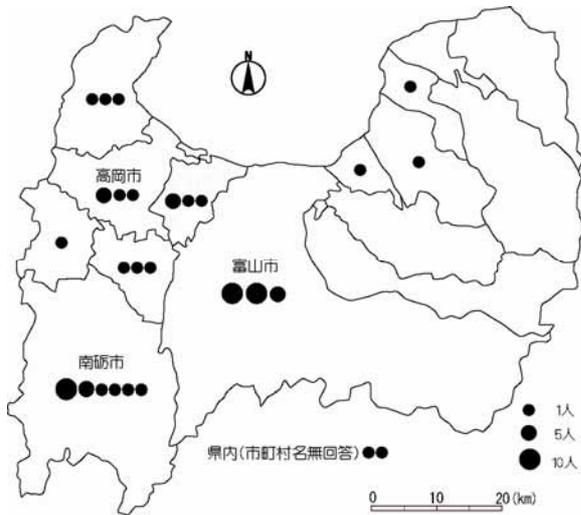


図7 観光客の在住地(富山県内)
(聞き取り調査をもとに作成)

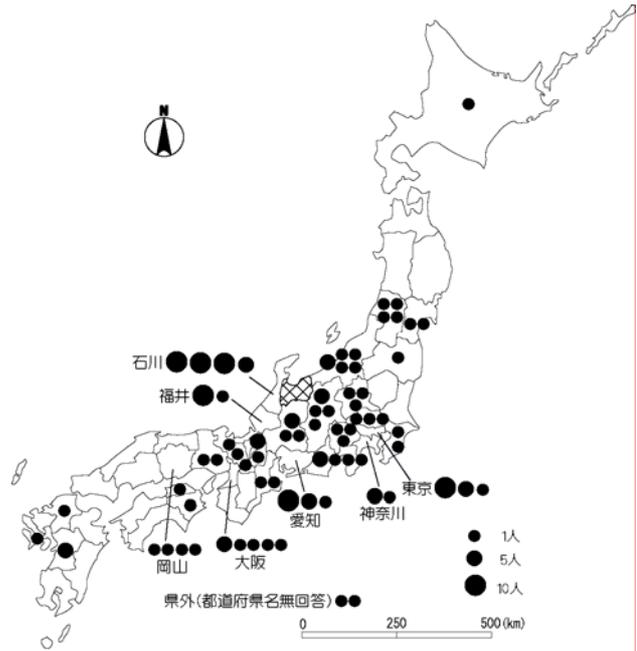


図8 観光客の在住地(県外)
(聞き取り調査をもとに作成)

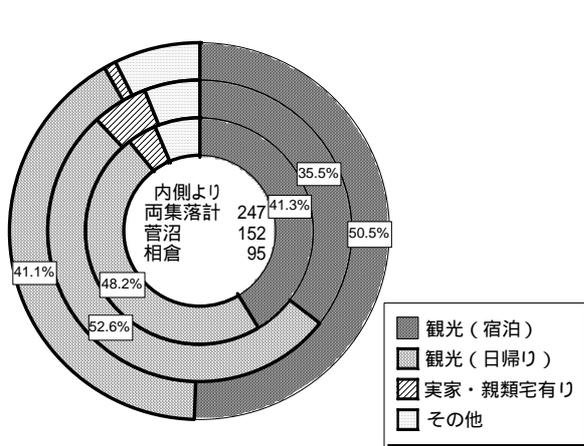


図9 五箇山への来訪目的
(聞き取り調査をもとに作成)

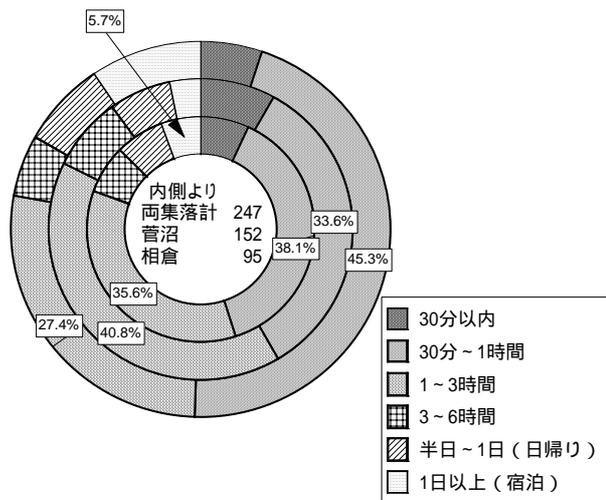


図10 五箇山での滞在時間
(聞き取り調査をもとに作成)

2) 来訪目的

五箇山への来訪目的は、観光(日帰り)が247名中119名(48.2%)でもっとも多く、次いで観光(宿泊)102名(41.3%)、その他16名(6.5%)、実家・親類宅を訪ねる10名(4.0%)の順となり、観光目的が全体の89.5%を占めていた(図9)。調査地区別にみると、菅沼では観光(日帰り)が152名中80名(52.6%)を占め、観光(宿泊)の54名(35.5%)を上回っていた。これに対して相倉では観光(宿泊)が95名中48名(50.5%)で、観光(日帰り)の39名(41.1%)を上回っていた。

3) 利用交通手段

五箇山に来るのに利用した交通手段は、自家用車が187名(75.7%)でもっとも多く、次いで観

光バス 37 名(15.0%)、その他(レンタカー、自転車等)16 名(6.5%)、バイク 4 名(1.6%)、路線バス 3 名(1.2%)の順であった。これを調査地区別にみると、菅沼では 152 名中 131 名(86.2%)と自家用車が圧倒的多数を占めたが、相倉では自家用車が 95 名中 56 名(58.9%)でもっとも多いものの、観光バスも 33 名(34.7%)と多かった。

菅沼は五箇山インターチェンジから近いものの、大型バスの駐車場が合掌集落近くにはない。大型バスで来た観光客は、青少年旅行村の駐車場から約 5 分間徒歩で合掌集落まで移動しなければならない。バス旅行の場合は行程があらかじめ定められているため、片道 5 分の移動でも大きな時間的ロスとなる。とくに近年は高齢者によるバス旅行が多いため、徒歩での移動は敬遠される。いっぽう、相倉は山の中腹にあるため国道 304 号の急坂を上り下りする必要がある、大型バスの往来には不都合である。しかし、相倉では世界遺産への指定を機に大型バスの駐車場を整備しており、駐車場整備の有無が両集落の結果の差に結びついていると考えられる。

4) 五箇山地域内での立ち寄り場所

五箇山地域内での立ち寄り場所については、調査地区の合掌集落を回答に含めた観光客とそうでない観光客がいた。このため、両集落以外の立ち寄り場所をみると、道の駅たいら・五箇山和紙の里が 35 名でもっとも多く、次いで村上家が 32 名、道の駅上平・ささら館が 26 名であった。

村上家は両合掌集落を結ぶルート上に位置するが、五箇山和紙の里は旧平村中心部の下梨から東に外れた位置にあり、金沢方面から出入りする車はあまり通らない(図 1)。ささら館は五箇山インターチェンジより南にあり白川郷方面から高速自動車道を経由して五箇山に出入りする車は通らない。しかし、3 つの施設に立ち寄った人数には大差がなく、立地の差が観光客数の差には結びついていなかった。また、立ち寄った観光客はもっとも多い五箇山和紙の里でも、全回答者の 14.2%にすぎない。この結果をみるかぎり、両合掌集落以外の観光資源はやや魅力に欠けるといわざるを得ないであろう。

5) 滞在時間

滞在時間は 30 分～1 時間が 94 名(38.1%)でもっとも多く、次いで 1～3 時間が 88 名(35.6%)であった(図 10)。五箇山に 3 時間以上滞在する観光客(宿泊客を含む)は、合わせて 48 名(19.5%)にすぎず、五箇山への滞在時間は回答者の 80.5%が 3 時間以内にとどまった。また、2)の来訪目的は観光(宿泊)とした回答者が 102 名(41.3%)いたが、この質問で宿泊と答えたのは 14 名(5.7%)にすぎず、残る 88 名(35.6%)は五箇山以外の地域に宿泊したことが明らかとなった。

調査地区別にみると、相倉では 30 分～1 時間が 43 名(45.3%)でもっとも多く、次いで 1～3 時間の 26 名(27.4%)であった。いっぽう、菅沼は 1～3 時間が 62 名(40.8%)でもっとも多く、30 分～1 時間が 51 名(33.6%)でこれに次いだ。相倉の場合は、出発時間に制約される観光バスで訪れた客の割合が高いため、菅沼に比べて滞在時間が短めになったと考えられる。

6) 進入・退出方向

五箇山への進入・退出方向をみると、もっとも割合が高かったのは富山・立山・黒部方面の 28.3%で、以下は金沢・加賀・東尋坊方面 20.9%、白川郷・高山方面 20.6%、高岡・氷見方面 17.0%の順となった¹¹⁾。調査地区別にみると、菅沼では富山・立山・黒部方面 27.6%、金沢・加賀・東尋坊方面 24.3%、白川郷・高山方面 19.4%、高岡・氷見方面 16.8%で、順位は全体と同じであった。いっぽう、相倉では富山・立山・黒部方面 29.5%、白川郷・高山方面 22.6%、高岡・

氷見方面 17.4%、金沢・加賀・東尋坊方面 15.3%と、2 位以下の序列が異なった。

これらの結果をみると、もっとも割合が高かったのはいずれも富山・立山・黒部方面で、五箇山を訪れる観光客の 3 割近くが少なくとも往復のどちらかは富山・立山・黒部方面から出入りしていたことが明らかとなった。しかし、これらはあくまで五箇山を訪れた観光客のみを対象としたもので、白川郷を訪れた観光客は多くが五箇山にも富山・立山・黒部方面にも立ち寄らない可能性が捨てきれない。交通流動に関しては、白川郷や周辺地域も含めた広域的な調査の必要があると考えられる。

7) 高速自動車道利用の有無と利用インター

五箇山にくる際に高速自動車道を利用した人は 135 名(54.7%)、利用しなかった人は 111 名(44.9%)、不明は 1 名(0.4%)であった。調査地区別では、相倉で利用した人の割合が 57.9%となり、五箇山インターチェンジに近い菅沼の 52.6%を上回った。利用したインターチェンジは、五箇山が 135 名中 47 名(34.8%)ともっとも多かったが、第 2 位は 31 名が利用した小矢部インターチェンジであった。また、その他の回答の中には在住地(出発地)に近いと思われるインターチェンジを答えた例もあった。これらについては不可解な点が多いため、今後の検討課題としたい。

おわりに

本研究では、宿泊施設や観光客への聞き取り調査をもとに五箇山における観光の実態、とくに東海北陸自動車道の開通が五箇山観光にもたらした影響について考察してきた。この結果、宿泊施設への聞き取りでは、近距離からの宿泊客が少ないこと、宿泊施設の多くで東海北陸自動車道の開通後、宿泊客が減ったことなどが明らかとなった。また観光客への聞き取り調査では、日帰り観光客が多いこと、観光客の 8 割強は滞在時間が 3 時間以内と短いこと、宿泊する観光客も大部分が五箇山地域以外で宿泊することなどが明らかとなった。反面、観光客の交通流動に関しては、五箇山地域のみを対象とした考察では不可解な点が多く、多くの課題を残した。

ここまででは今回の調査で明らかになった問題点ばかりをとりあげたが、五箇山観光の今後に向けて期待できる点も見いだすことができた。まず、観光客は北海道から九州まで全国各地から訪れており、「世界遺産ブーム」が去っても依然として全国的な人気は衰えていないことがうかがえた。また、こきりこ、麦屋踊り等の実演や講習などに取り組んでいる民宿や、合掌家屋を利用した民宿は、観光客の心をしっかりとつかんでいることが明らかになった。こうした民宿の実態は「伝統文化が体験できる」、「合掌家屋に泊まれる」といった五箇山にふさわしい付加価値をつければ、集客力をある程度まで高められることを示唆している。

章の文中では、白川郷は「勝ち組」、五箇山は「負け組」になりつつあると述べたが、これはあくまで、現状が打破できなければそうなるという意味合いである。五箇山は平地に恵まれていないこともあって、観光地としての規模では半永久的に白川郷を上回ることはできないであろう。しかし、五箇山には白川郷にはない伝統的な民俗や文化が数多く残されている。白川郷とは競合関係になるのではなく、庄川と合掌集落によって結ばれた一つの地域として、お互いが連携をとりながら差別化を図っていくことが必要であろう。

本稿は平成 16・17 年度「地域地理学」の一環として実施した地域調査(2004 年 11 月 20~21 日、2005 年 10 月 29~30 日)の成果をもとに作成した。参加学生は以下のとおりである。

【2004 年 11 月調査】(学年は調査実施時)

[観光調査班]牧野浩士・内山翔太・野尻一等(地域学部 2 年)、大后千景(国際教養学部 1 年)田中雄介(地域学部 1 年)

[町村合併調査班]水上彰人(人文社会学部科目等履修生)、竹内 希・中村大毅(人文社会学部 3 年)、濱多雅俊(人文社会学部 2 年)、富永雄介・山口佳範(国際教養学部 1 年)

【2005 年 10 月調査】

[観光調査班]牧野浩士・和田典之・布目悠祐(地域学部 3 年)、美濃 涼(地域学部 2 年)、泉田真理・王 俊、姜 南・焦 美娟・条谷晴奈・堀知佳子・李 豊(地域学部 1 年)

現地調査にあたっては、三笑楽酒造株式会社社長の山崎 洋氏、五箇山青少年旅行村「合掌の里」合掌の里支配人の古瀬 順真氏、五箇山観光協会の山崎友紀恵さんほか多数の方々にご指導を賜った。末筆ながらここに記して厚く御礼申し上げます。

注および参考文献

- 1) 溝尾良隆、『観光学 - 基本と実践 - 』、(2003)古今書院、160p
- 2) 森田優己、白川郷における観光客の増大と交通の課題、『白川郷 - 世界遺産の持続的保全への道』(合田昭二・有本信昭編、2004)ナカニシヤ出版、pp.87-109
- 3) 岡本勝規、観光客誘致と公共交通、とやま経済月報 平成 16 年 8 月号、(Web 出版、2004)富山県経営管理部統計調査課
<http://www.pref.toyama.jp/sections/1015/ecm/back/2004aug/tokushu/index1.html>
- 4) 富山県知事政策室・未来とやま戦略会議資料による。
- 5) 新藤正夫、五箇山谷の変容、『日本地誌 第 10 巻 富山県・石川県・福井県』、(1970)二宮書店、pp.136-144
- 6) 富山県経営管理部統計調査課ホームページ「とやま統計ワールド」(URL 下記)に掲載された富山統計アーカイブスによる。 <http://www.pref.toyama.jp/sections/1015/index2.html>
- 7) 白川郷・五箇山の合計数値は下記による。
内閣府政策統括官(経済財政分析担当)、地域の経済 2005 - 高付加価値化を模索する地域経済 -、(Web 出版、2005)内閣府
- 8) 五箇山地域の範囲には旧平村・旧上平村・旧利賀村の 3 村が含まれるが、旧利賀村は五箇山観光協会に加盟していないこと、観光客の考える「五箇山」の範囲は多くの場合、庄川本流域の旧平村・旧上平村であることを考慮し、聞き取り調査の範囲は旧平村・旧上平村に限定した。
- 9) こきりこドット・コム <http://www.kokiriko.com/top.html>
- 10) 男女別の「未記入」は、一部の観光客が「滞在時間がない」、「質問を聞くのが面倒」といった理由で自ら調査用紙に回答を記入したが、性別を記入し忘れたことによる。なお、年齢等の「無回答」は回答者が意図的に回答を避けたもので、「未記入」とは異なる。